

はじめに

小石川後楽園、浜離宮^{はまりきゆうおんしといえん}恩賜庭園^{きゆうおんしといえん}、旧芝離宮^{きゆうしばりきゆうおんしといえん}恩賜庭園^{きゆうおんしといえん}、六義園^{りくぎえん}、この四つの「園」に共通するのは？ そう、江戸時代につくられた大名庭園なのである。現在は、国により文化財指定され、都立公園として一般市民に利用されている。

大名庭園復元への道のり

慶長八（一六〇三）年、江戸に幕府を開いた徳川家康は、大名たちに府下に屋敷を構えさせた。寛永一二（一六三五）年の武家諸法度^{ぶけしよぽうど}で参勤交代が正式に制度化されたため大名屋敷が増加、その後、おおよそ三〇〇の大名家が複数の屋敷を構えることになり、その数一〇〇〇か所近くあったという。それぞれの屋敷には大小さまざまな庭園があったことだろう。

もともとは將軍の御成り^{おな}（屋敷への訪問）を意識して作庭した「大名庭園」だったが、それその大名が自らの利用目的を意識して、好みの意匠を凝らすようになる。庭師が活躍し植木屋が繁盛し、庶民も園芸に親しむ。平和で、みどり豊かな江戸の街があったのだった。

しかし、大名庭園のほとんどは明治維新（大政奉還…一八六七年、廃藩置県…一八七一年）を契機に失われていく。残った庭園も、大正一二（一九二三）年の関東大震災、第二次世界大戦

の戦火、とりわけ昭和一九〇二（一九四四、四五）年の空襲で大きな被害を受ける。昭和三〇年代には高度経済成長期を迎え、江戸のみどりの文化は忘れられてもいく。

私が東京都に入職したのは、昭和六〇（一九八五）年である。大学で物理学を学んだ私は、昭和五五年、IT・電子機器の輸出入販売の技術商社に入社した。一方で、子どものころから自然が大好きだった私は、慣れ親しんだ多摩の丘陵が切り崩されて住宅地に変わっていく姿に^{じくじ}忸怩たる思いがあった。

ある日、転機が訪れた。地元の日野市が主催した自然観察会に参加し、自然保護にかかる部署が行政にあることを知って、自分もそんな仕事をしてみたいと思うようになった。

そして、なんとか東京都の職員採用試験を通り、造園の専門職に就いた。公園や街路樹などの整備および管理、都市緑化などを担当する部署の技術職員として、最初の三年間は街路樹係として墨田区、江東区、江戸川区など下町の街路樹の維持管理を担った。街路樹の^{せんてい}剪定やツツジなどの植樹帯の刈込の時期を見極め、時にはアメリカシロヒトリの駆除も行なった。自然保護とはちょっと違うようにも思ったが、晴れて「造園」に関わることになったのである。

しかし、本書の中心テーマである「大名庭園の復元」に私がたどりつくのは、少し先のことであった。

大名庭園の魅力

小石川後楽園は、文京区後楽園にある東京ドームの西に位置する。ドームの建築面積四万六七五㎡の約一・五倍七万八四七㎡の広さの都立公園だ。ドームとは異なり、おおむねいつもひっそりしている。

東門から内庭を通り、「唐門」を横目に進み、本来の庭園内に入る。唐門は空襲で焼失したが、令和二（二〇二〇）年末に復元された建物だからよく観察してほしい。唐門を過ぎると、そこは鬱蒼とした樹木に囲まれた園路である。園路は、茶室などで見られる「延段」という敷石の通路で、大小の自然石と切石を組み合わせてある。この園路は「木曾路」の見立てで、そばには「木曾川」に見立てた小川が流れている。

樹木に囲まれ、ゆるやかに曲がりくねった園路（木曾路）を進んでいくと、とたんに視界が開け、大きな池（大泉水と呼ぶ）が広がる。「琵琶湖」である。目の前に飛び込んでくるのは徳大寺石と呼ばれる大きな壁のような石が据えられた島だ。中国の神仙思想で東方海上にあると信じられていた「蓬莱島」である。目を右に転じると、岩礁のような島が見える。それは、琵琶湖の観音霊場として知られる「竹生島」である。小石川後楽園には、他にも京都の渡月橋・大堰川・通天橋といった名勝地に見立てた景色が縮景の技術を使って園内に写し取られているのだ。そんなことを知れば、園路を進むにもわくわく感が増すはずだ。

四つの大名庭園は、来歴は異なるが江戸時代初期・前期にルーツを持つ。小石川後楽園は寛永六（一六二九）年に、水戸徳川家初代藩主の頼房が築庭し、二代藩主の光圀が完成させた大

泉水を中心とした回遊式の大名庭園であり、和式と中華式がミックスされ、日本や中国の各地の名勝地を縮景に取り込んだ手法は、その後の大名庭園のモデルとなったといわれている。

浜離宮恩賜庭園は、承応三（一六五四）年、徳川四代将軍家綱より、将軍の鷹狩場であった海辺の葦原わしはらの地を拝領した甲府宰相の松平綱重つなしげが海を埋め立てて別邸を整備し、そこに築庭された庭が始まりである。その後、綱重の子の綱豊つなとよが六代将軍家宣いえのふになったことにより将軍家唯一の庭園となった。

旧芝離宮恩賜庭園は、明暦（一六五五～一六五八年）のころに海面を埋め立てた土地を、延宝六（一六七八）年に老中・大久保忠朝ただともが将軍家綱から拝領して建てた屋敷にある。

六義園は、元禄八（一六九五）年、五代将軍徳川綱吉つなよしの側用人柳沢吉保そばようが七年をかけて、綱吉より与えられた地に築庭した。

起伏に富んだ地形を使った小石川後楽園、将軍の鷹狩場であった中央区にある浜離宮、海面を埋め立てた港区にある旧芝離宮、平坦な地に池を掘り山を築いた文京区本駒込にある六義園。それぞれの大名庭園は、立地を見極めて最大限に条件を活かしている。また、大名の個性と知性が反映する、どこまでも魅力的な庭園なのである。

復元といいつつ

昭和六三（一九八八）年、私は建設局公園緑地部公園建設課に配属になった。

翌年の平成元年、東京都は「文化財庭園の保存・復元・管理等に関する専門委員会」を設立し、平成二年には計画を策定した。その基本方針の一つが「庭園を計画的に修復・復元し、適切に管理していく」ことであった。基本方針には他に、保存や公開、次世代への継承、江戸庭芸の伝承の場とすることなどが盛り込まれている。

この計画に従うかたちで、私も大名庭園の修復工事の下準備に関わることになる。

公園建設課で私は、代々木公園や日比谷公園など都内約六〇か所の都立公園の計画・整備・管理運営業務を担当するようになったが、大名庭園もその中に含まれていた。

一口に「復元」といっても、実はけっこう難しい。江戸の前期から明治まで、大名庭園は持ち主と姿を変えながら現在に至っている。復元はいつの時代に合わせるのか、史料などが残されているのか、本当の姿・本当の景色はどのようなものであろうか。利用の復元、文化の再現とはなんだろう。大名庭園の復元は始まったばかりである。今まさに現在進行形なのだ。大泉水の浄化事業のために訪れた小石川後樂園で、私は初めて絵地図や設計図ではわからない大名庭園の魅力を知った。ストーリーがある庭園の見せ方、風景ごとの演出効果の巧みさを体感したのだった。

本書に記した大名庭園の復元にかかる取り組みから、エピソードを二つ簡単に紹介しよう。一つは、カワウの引っ越し大作戦。もう一つは、ビルの谷間に沈む闇の正体である。

景観を取り戻すための六年間

カワウは、浜離宮（園内に二か所ある鴨場^{かもば}、かつて鴨猟が行なわれた場所）での一件だ。

大名庭園の復元には、幕末に來日したイギリス人報道写真家F・ベアトの写真が参考になった。文久三（一八六三）年^{あたこやま}に愛宕山（港区）から撮った写真には浜離宮の並びに第六台場が写っているが、この台場にカワウを誘致したのだった。

平成二（一九九〇）年以降カワウは、浜離宮でコロニーを形成しはじめ、その糞害^{ふんがい}も次第に大きくなり、とりわけ鴨場は目を背けたくなるほどだった。そのため、平成五年に日本野鳥の会研究センターの協力を得て調査を実施、結局カワウに出て行ってもらうことになる。そのために、誘致先の第六台場にサギとカワウのデコイを設置したり、営巣しやすい環境を整備して浜離宮で落とした巣を置いたり、浜離宮では夜間バケツを叩いたり、サーチライトを照らすなどの対策を二年半実施した。

けれどもカワウは庭園に留まり、樹木はカワウの糞で真っ白になるありさまだった。そこで、昼間は餌を獲りに出かけ夕方になぐらに戻るカワウの習性を捉えて、留守のあいだに、カワウが営巣する場所付近で、水面上を横切るように麻縄のロープを木々の樹冠に張り巡らしてみた。二年間毎月、第六台場を見下ろすレインボーブリッジの歩道からカワウの観察を続けていたが、ロープを張り巡らした当日、浜離宮からUターンをして戻ってくる群れが現れた。そして、

第六台場の上を旋回し始めたという。こうして、平成八（一九九六）年一月二六日、カワウの引越大作戦に勝利した。従来の景観を取り戻し、『復元』する戦いでもあった。

鴨場の修復事業は、浜離宮の復元事業の先駆けとなった。その後、老朽化し崩壊寸前であった横堀の護岸や海手お伝い橋の補修、改修が行なわれ、浜離宮の復元は計画的に事業が進められていった。そして、一代将軍家斉（いさな）の時代の絵図にある松の御茶屋、燕の御茶屋、鷹の御茶屋の三棟の御茶屋が復元され、まさに家斉が楽しんでいたころの庭園の姿に戻りつつある。

知ってもらってから始まる

ビルの谷間に沈む闇は旧芝離宮恩賜庭園だった。これは、私の実体験である。

旧芝離宮はＪＲ浜松町駅のすぐそば竹芝地区にある。平成二五（二〇一三）年に竹芝地区の「都市再生ステッププロジェクト」がスタート、「竹芝地区エリアマネジメント」と「竹芝まちづくり協議会」とが協働して街づくりに取り組むことになった。この地に江戸時代からある大名庭園が街づくりにおける貴重な場となることが予期された。

庭園管理者として参加した打ち合わせの席で、私は衝撃を受けた。出席者のほとんどが旧芝離宮について知らなかったのである。知っていても、樹木が生い茂るお屋敷のようなものといった認識だった。夜になると、ビルの谷間に沈む闇でしかなかったのである。そこで、街づくり関係者へ向けて園内を案内、庭園の成り立ちや見どころなどをガイドしたのであった。そし

て、周辺の会社で働く人が参加できる夜間開園を試行することになった。それが現在も続くライトアップ事業「芝離宮夜会」になっていく。

今の時代にあった大名庭園の活用について、考えさせられた一件であった。

これから、江戸の大名庭園の歴史を紐解くとともに、大名庭園の復元がどのような経緯で進められてきたのかを順を追って記していく。景観や施設を復元するだけでなく、江戸時代に造られた大名庭園を現在の私たちがどのように活用し、使いこなすのかという試行錯誤についてもさらに触れてみたい。ハードとソフトの施策がいまった江戸の大名庭園の再生のありさまを、少しでも知っていただき、大名庭園に興味を持っていたら本望である。本書が大名庭園の入口になれば、こんな幸せなことはない。

浜離宮恩賜庭園の「潮入の池」には、今も何匹ものクロダイが紛れ込んできく。大名が、御台所や姫君たちが、この池で魚釣りを楽しんだといわれる。また、小石川後楽園に子孫繁栄を願う陰陽石いんようせきが置かれているのを知る人は少ない。これは徳川光圀が子宝に恵まれなかったからだという説もある。このようなエピソードも織り交ぜていきたい。

東京の中心部、林立するビル谷間に居ながら、江戸の大名や姫君を身近に感じることができる。来園者にとって大名庭園は生きた博物館ともいえよう。

大名庭園へようこそ！

江戸大名庭園は挑む◎もくじ

はじめに..... 3

第I章 大名庭園の誕生

一節 武士の街「江戸」になって..... 22

1 家康の江戸入城..... 22

2 参勤交代制度と明暦の大火が増やした武家屋敷..... 25

3 みどり（草花と樹木）にあふれた江戸の街..... 26

二節 庭園の魅力は自然と地勢を活かすことから..... 28

1 大名たちにとっての庭園..... 29

2 江戸大名庭園の特徴..... 32

池を中心に広く巡って移ろう景色を楽しむ／テーマとストーリーで構成する
汐入で演出し水を確保する

三節 今に残る江戸の大名庭園……………38

(i) 小石川後楽園―国指定特別史跡・特別名勝……………38

(ii) 浜離宮恩賜庭園―国指定特別名勝・特別史跡……………39

(iii) 旧芝離宮恩賜庭園―国指定名勝……………41

(iv) 六義園―国指定特別名勝……………42

(v) 都内にある大名庭園のなごり……………43

第Ⅱ章 失われ変わっていった大名庭園

一節 みどりの街を支えた先はどうなるのか……………48

1 大名庭園を消した明治維新……………48

2 壊滅的被害を受けた関東大震災……………50

石灯籠は倒伏、建物ばかりか樹木も焼失／避難者を救った庭園と命を奪った被服廠跡地

3 複合的被害を受けた第二次世界大戦……………53

焼け野原になった東京で庭園の荒廃は進んだ／財ではなく材としての価値？　そして残った地割

4 戦後復興期に利用されて……………55

みどりの公共空間として再生を図る／貧ポートや「鯉来い橋」、娯楽の提供が模索された

二節 文化財保護へかじが切られて……………58

1 文化財指定された大名庭園の保護と利用……………58

特別名勝・特別史跡に大名庭園を指定／来園者の目的と利用方法／
庭園管理の明確化―公開時間制限と有料化

三節 復元に向けて動き出す……………64

1 保存と利用を図るという文化財庭園の位置づけ……………64

2 中島の御茶屋を三九年ぶりに復元……………66

3 イコモス総会で課題とされた「木・修復の文化」……………68

4 文化財庭園の復元事業が動き出す……………70

「文化財庭園の保存・復元・管理等に関する計画」の策定／
「東京都における文化財庭園の保存管理計画」の策定

第三章 浜離宮恩賜庭園における修復・復元

一節 「中島の御茶屋」の復元から考える……………78

1 「中島の御茶屋」の復元……………78

憩いの空間を文化財として見直す／基礎を残してなくなった中島の御茶屋／
一三年経って工事着手、焼失して三七年で蘇る

2 復元工事にあたって何をどう考えるか……86

庭園の本質的価値を知る／どの時代に復元するか／復元は一番利用された家斉の時代に

二節 復元工事は鴨場の修復から始まった……………99

1 鴨場が選ばれた理由……99

將軍の御成りは鴨場あればこそ／不忍池から来たカワウが住みだす

2 第六台場へのカワウ誘致作戦……103

カワウ追い出し対策を行なっても…／功を奏したねぐら対策

3 「庚申堂鴨場」の修復工事……105

鴨場修復は宮内省時代に合わせる／時代を垣間見せた浚渫工事で出土したもの

4 「庚申堂鴨場」引堀護岸の修復工事……111

職員体制は江戸時代と現代とほぼ同じ／共通する維持管理の作業

三節 浜離宮庭園の中心景を復元する……………114

1 護岸の老朽化対策・安全上必要な緊急対応の整備……114

景色を蘇らせるには…／「潮入の池」の価値

四節 「潮入の池」の護岸を修復する……………116

- 1 「横堀」の護岸改修……………116
戦後の補修はコンクリートやモルタルを使用／〈玉石護岸〉長手使い型と小口使い型を試行
- 2 「大泉水」の護岸修復……………120
背面土砂が流出していた護岸／護岸の形状は一切不明

五節 橋を修復する……………123

- 1 「海手お伝い橋」の改修……………123
通行止めの橋を早期に渡れるよう改修／現況の景観に配慮したうえでの修復
- 2 「中の橋」の改修……………127
コンクリート部材の違和感と著しい劣化に対応／資料整理の重要性を確認
- 3 「中島橋」の改修……………130
正式な玄関となる橋／木橋の姿に戻す

六節 御茶屋群を復元する……………133

- 1 活用された御茶屋……………133
御茶屋があつてこそその大名庭園／利用目的に応じた五つの御茶屋

2 「松の御茶屋」の復元工事……………135

健全な状態で残っていた礎石／見える高さの復元

3 「燕の御茶屋」の復元工事……………140

接客の場としての利用／將軍家の御茶室として忠実に復元

4 「鷹の御茶屋」の復元工事……………143

藁葺屋根を再現

七節 修復・復元工事の進捗状況……………147

1 その他の実施工事……………147

「中の御門」復元的整備／「内堀」護岸修復／「旧稻生神社」の解体・復元

2 残されている復元工事……………153

第Ⅳ章 大名庭園の景色の再生

一節 植栽景觀を再現する……………160

1 大名庭園で重要となる植栽……………160

並行して進めるべき施設と植栽という復元要素／往時の景觀を推定して景觀を創出

2 庭園芸術としての価値……………161

特定が困難な植物の種類・大きさ／戦後復興下の緑化政策の影響

二節 どうやって植生を再現するのか……………164

1 基本的な庭園技法……………164

縮景／借景／見立て／樹芸

三節 樹木管理により景色を蘇らせる……………166

1 樹木管理の実際……………166

史資料や絵図面に基づいた景觀の再生／かつてあったことのイメージを形に

2 樹木整理による作庭意図の再現……………170

広がりのある大泉水を再生／苦勞を伴う伐採作業

四節 “江戸のみどり”を東京そして世界へ伝える……………174

1 現代東京における江戸大名庭園のあり方……………174

都市緑化の推進のもと巨木に成長／知らせたい“江戸のみどり”と庭園技術

2 大名庭園の作庭と樹木の果たす役割……………176

田んぼのある景色と「一つ松」の再生／大名庭園の本質、本当の姿

3	海外の日本庭園……	180
---	-----------	-----

V章 大名庭園の魅力を伝える取り組み

一節	知ってもらい活用してもらうには……	186
----	-------------------	-----

- | | | |
|---|--|-----|
| 1 | 庭園は生きた文化財…… | 186 |
| 2 | 東京都公園協会が取り組みを推進…… | 187 |
| | 意外な来園者アンケート結果／庭園の活用開始／「景（空間）の復元」と「利用の復元」 | |

二節	利用の復元に向けて新たな事業を始めて……	190
----	----------------------	-----

- | | | |
|---|---|-----|
| 1 | 「利用の復元」二つの試み…… | 190 |
| 2 | ライトアップ事業をスタート…… | 191 |
| | 勤め人をターゲットにした夜間利用開始の苦労／反対意見を経てライトアップを試行／
しだれ桜のライトアップ／ライトアップ事業成果の差異／ライトアップは非日常性がポイント | |

三節	庭園ガイドボランティアを育てて……	198
----	-------------------	-----

- | | | |
|---|--------------------------|-----|
| 1 | 江戸庭園物語の語り部を…… | 198 |
| 2 | 「都立庭園ガイドボランティア養成講座」の開講…… | 200 |

3 庭園ガイドツアーの役割……202

ガイドツアー参加者が知りたいことは？／ガイドボランティアになった理由は？／ガイドボランティアになってみて

四節 対象ごとにさまざまな取り組みを行なって……206

1 大名庭園を舞台とするイベント……206

史資料を基にしたイベント／外国人観光客に向けたイベント／子どもたちに向けたイベント／世界に向けた情報発信イベント／地域との関係

五節 地域とともに大名庭園を次世代に伝えるために……217

1 エリアマネジメントによる街づくり……217

エリアマネジメントとは／歴史遺産・大名庭園とスマートシティ・竹芝

2 エリアマネジメントのなかのイベント……221

演出効果とPRで成功／知られていなかった庭園の存在／維持存続は地域の人々に守られてこそ

3 次世代に大名庭園を引き継いでいくために……225

民間の力でイベント大成功／大名庭園と地域との連携

4 広がる大名庭園の活用……228

ユニークベニューに指定された浜離宮庭園／大名庭園丸ごと体験のタベ

コラム

巨大都市・江戸の範囲……………44

愛宕山から見た江戸の街……………45

江戸の園芸ブーム……………75

歴代将軍と大名庭園……………156

各地の大名庭園……………183

庭園へ行くこう……………233

参考文献……………234

おわりに……………240

第I章

大名庭園の誕生

一節 武士の街「江戸」になって

1 家康の江戸入城

天正一八（一五九〇）年八月一日、徳川家康が関八州の領主として江戸城に入った。そのときから「江戸の街づくり」が始まったといっているだろう。当時の江戸は、日比谷入り江が大きく江戸城近くの内陸部まで入り込む湿地の多いデルタ地帯であったといわれており（図1）、江戸湊は鎌倉時代より多くの商船の行きかう港湾であった。

長祿元年（一四五七）、江戸の地に最初に城を築いたのは、扇谷上杉家の家臣である太田道灌であった。道灌亡き後、江戸城は後北条氏の支配下にあったが、天正一八年の豊臣秀吉による小田原攻めにより後北条氏は滅び、後北条氏の旧領である関八州を与えられることになった家康が、江戸城の新たな城主となったのである。

江戸に乗り込んできた徳川家康が初めに取り組まなければならなかったことは、江戸に入城する際に従えてきた家臣団や、江戸の街の生活を支える商人たちを江戸に呼ぶための住居地を確保することであった。



図1 家康が江戸に入城したころの江戸
日比谷入江が大きく江戸城付近まで入り込んでいる（鈴木理生『江戸はこうして造られた』ちくま学芸文庫、2000年より）

徳川家臣団及びその家族、そして徳川家とともに同行する商人一行も含め、旧領地を後にして江戸に向かった人々の大移動により、江戸の街はその年の暮れには人口がおよそ三〇万人に膨れ上がってしまった。

当時の江戸は、江戸城の前に茅葺民家（かやぶき）が一〇〇軒ほど並ぶ寂れた場所であったといわれており、江戸の周辺を含めて多く見積もっても五〇〇〇人程度の人口しかなかった。そんな田舎町に、駿河・三河・遠江・信濃・甲斐（とうとうみ）という先進的な領国を持つ大大名とその家臣団が突然移動して、江戸の街は人であふれかえってしまったのである。

そこで、家康が最初に行なったのが、物資輸送のためのインフラ整備としての道灌濠開削（どうかんぼりかいさく）であった。湿地帯に運河を造り、掘り上げた土砂で土地を整備し商人たちの住める場所を整備していった。

引き続いて行なわれたのが、当時

有数の塩田であった行徳（現在の千葉県市川市行徳地区及び浦安市）から塩を確保するための運河を整備することであった。塩は人間が生きていくうえでは不可欠であり、岩塩のない日本においては海水からの製塩が必要で戦国時代には重要な戦略物質でもあった。

家康が江戸に入城したころは、まだ北条氏の残党などがあり、江戸城の拡張にまず手をつけたいところではあったであろうが、城郭の修復拡大を後回しにしたのは、秀吉の生存する時代には大規模整備を控えていたと考えられる。

その後、慶長五（一六〇〇）年の関ヶ原の合戦を経て天下を統一し征夷大將軍となった徳川家康は、慶長八年江戸に幕府を開き、江戸の街づくりはさらに発展することになる。秀吉の配下であったところに行なわれた道灌濠などの開削工事は、当然家康直属の武士団自らが作業を行なわなければならないが、將軍となった家康は全大名に対して禄高に応じて労役を課する、いわゆる天下普請により大規模整備を進めることができるようになったのである。

天下普請の最初の大規模工事は外濠の整備と日比谷入り江の埋め立てであった。天下普請に駆り出された大名たちは、江戸城の外濠を新たに掘削し、その残土で日比谷入り江を埋め立てた。大名たちはまだ水面下にある土地を割り当てられ、そこを埋め立てて自分たちの宅地を造成していった。

日比谷入り江が埋め立てられ外濠の一部が完成するのは、二代將軍秀忠が江戸に入城した慶長一年であった。その後も天下普請は続けられ、最後の天下普請は万治三（一六六〇）年仙

台藩に対する運河神田川整備工事の発令であった。その完成で江戸の街づくりの土台が整ったのである。

2 参勤交代制度と明暦の大火が増やした武家屋敷

江戸の街づくりで特徴的なのは、將軍の下に多くの大名とその家臣団が居住する大名屋敷で構成されていたことである。一人の大名のもとにその家臣団が居住する城下町とは異なり、江戸の街の中に多くの小国家が存在するような特殊な形態であった。家康は、大名に対して江戸城下の土地を与えそこに屋敷を構えさせたが、忠誠を示す大名たちは自ら率先して妻や子（大名の世継）等を人質として江戸に住まわせるようになった。

寛永一一（一六三四）年、幕府は妻子を領地においている譜代大名に、妻子を江戸に移すように命じた。そして寛永一二年に三代將軍家光は武家諸法度を改訂し、制度としての参勤交代を明文化した。その結果、江戸には、参勤交代を義務づけられた二百数家の大名の屋敷と幕府直属の家臣団である旗本・御家人あわせて一万家以上の屋敷、いわゆる武家屋敷ができたといわれている。

その武家屋敷の配置は役職や大名の譜代、外様といった分類によって決められていた。江戸城の周りは將軍家とその一族で固め、譜代大名は大手門周辺に配置し、老中などの要職者は本丸大手門近くに置いた。そして、外濠と馬場先濠で囲まれた大名小路から日比谷・桜田・霞が

関には外様大名を置いた。城の西方から北にかけては麴町台地こうじまちであり、そこには隅田川といった障害となるような河川がなく、自然の地形だけでは防備しがたいため、將軍直属の旗本を多数配置した。町人地は街道の集まる場所に置き、物流集積の拠点とするとともに繁華街が形成された。

五次に及ぶ天下普請が進められ、ようやく江戸の街の整備が終わろうとしていた明暦三（一六五七）年に発生した火災は、当時の江戸の市街地の約六割の地を焼き尽くし、被害は大名屋敷一六〇、旗本屋敷七七〇、町人地八百余町に達した。いわゆる明暦の大火である。

大火後の復興対策として、幕府は、江戸城内にあった紀州、尾張、水戸の御三家を城外に出し、江戸城周辺の武家屋敷を郭外の新開地へ大規模に移動させた。そのほか広小路や火除け地の設置など、大規模な江戸の街の改造が行なわれたのである。

このことにより、大名屋敷は、大名の住む上屋敷、妻子の住む中屋敷、震災等で上屋敷を失った場合の屋敷として下屋敷の三か所の屋敷を得ることとなった。自前でお抱え屋敷を手に入る大名もあり、江戸の街はそれまで以上に守りに優れた頑強で巨大な街へと生まれ変わるとともに、武家屋敷が江戸の街の大半を占める街となっていた。

3 みどり（草花と樹木）にあふれた江戸の街

大名屋敷の面積は、石高こくだかによっても大きく異なり一概にはいえないが、考古学的調査によつ

て明らかになっている東京大学本郷キャンパス内の加賀藩本郷邸は約二九ha。尾張、紀州、水戸の御三家の邸宅に匹敵する広さで、そこには女中衆を含めると三〇〇〇人を超える人々が住んでいた。

幕末の調べによると、一坪三・三m²として換算すると、水戸藩上屋敷（後の小石川後楽園）一〇万一八三一坪（約三三・六ha）、市ヶ谷尾張藩上屋敷七万四四八坪（約二四・六ha）、麴町紀州藩上屋敷二万四四八坪（約八・一ha）であった。

大名の禄高や格式と与えられた敷地との明確な法則はないようであるが、大名屋敷の標準的な地割は元文三（一七三八）年の記録「地割標準」によると、一万〜二万石で二五〇〇坪、五万〜六万で五〇〇〇坪、一〇万〜一五万で七〇〇〇坪であった。ちなみに、大名屋敷のほかの武家屋敷としては旗本屋敷が江戸城の北西から北に配置されていたが、それらの規模は九〇〇〇石程度で二三〇〇坪、一〇〇〇石程度で五〇〇〇坪と小さな規模となっていた。

規模もさまざまな大名屋敷であるが、これら武家地の面積は、享保一〇（一七二五）年の推計で、武家地四六・五㎞²、町人地八・七㎞²、寺社地一〇・七㎞²であり、その人口を見ると武家地約六五万人、町人地約六〇万人、寺社地約五万人となっている。つまり、武家地は江戸の街の約七〇％を占め、そこには人口の約五〇％の武士が生活し、江戸の人口の約四六％に及ぶ町人がわずかに約一三％の町人地に生活しているということである。町人は武士の五分の一の土地に密集して住んでいた。このことが、江戸は武士の街といわれる所以でもある。

明治時代、江戸を訪れた外国人は口をそろえて、江戸はいたるところ花が咲き樹木が生え、美しい都市であると称賛したという記録を残している。

安政六（一八五九）年六月から文久二（一八六二）年二月まで英国初代駐日大使であったラザフォード・オールコックは『大君の都―幕末日本滞在記―』の中で、

「これほど土地が肥え、鑑賞用の樹木が生育し、木の葉が豊かで変化に富み、生垣・木陰の細道・庭園・寺院の無数の遊園地（原文まま）などの手入れがきちんと行き届いている所は、イギリス本国を除いてはほかにない」と書き残している。

そして、オールコックから呼ばれて来日した英国の植物学者であるロバート・フォーチュンは、愛宕山から一望した江戸の街の眺めの美しさに感激をするのである。その大きな理由の一つとして、江戸の面積の七〇％を占める武家地にある庭園の草花や樹木などとも関係していたのではなかろうか。木斛もくこくや松、梅や楓かえで、躑躅つづじや椿つばきなど多彩な「みどり」が庭園を演出していたことだろう。大名庭園は、江戸の「みどり」を担う大きな存在であったのだ。

二節 庭園の魅力は自然と地勢を活かすことから

1 大名たちにとっての庭園

江戸の大名屋敷に、趣向を凝らした大名庭園が造られるようになったのは、なぜだったのか。江戸時代初期の大名の置かれた立場から考えてみたい。

家康の入府以降、大名は江戸城建設や江戸の街づくりのために多大な苦勞を強いられていたのである。従来の城造り・街づくりは、街道筋の交通の要所で、飲料水があり平地があり、守るにも街づくりにも有効である、といった土地を探し出し自然地を活かして城を築き街を造ってきた。

しかし、江戸の街は海辺の湿地を埋め立てて住むための土地を確保し、運河を開削して大量輸送手段を作り出し、大土木工事の末に飲み水を供給しなければならなかった。江戸の街はそれまでの日本にはなかった初めての臨海部に創り出された人工の街なのであり、その労働力を支えたのが各地の大名だった。

大名たちの不満は大きかったに違いない。明暦の大火も、反幕行動による放火であったといわれる所以もそこにある。しかし、多くの不満を抱えながらも大名たちは江戸幕府の命令に積極的に従い、労働力を提供していった。それだけ、戦国時代を終焉に導き、天下統一を果たした徳川幕府の力は強大であり絶対であったのである。

いくつもの大名が取り潰しになる江戸時代初期、江戸の街づくりとともに大名屋敷は次々と

造られていった。明暦の大火以後、大名屋敷や御成門は質素なたたずまいとなるが、それ以前は、将軍の御成り（屋敷への訪問）を促すかのような豪華絢爛な御成門の整備など、各大名はお家維持のため、将軍との関係をより深めるための必死の工作を行っていた。そのような時代のなかで、大名屋敷に大名庭園が生まれてきたのである。ではなぜ、大名庭園という回遊式の庭園が生まれたのかを考えてみることにする。

まず、一つ目の理由としては、江戸という新しい都市にあって、武蔵野台地と隅田川などの河川の河口にできた低地の入り組んだ多様な自然環境が残された場所、その幕府から与えられた土地を大名たちは自由に活用することができたからである。

例えば、江戸の初期、小石川台地の先端に造られた小石川後楽園は、「数百年の喬木生い茂りて当時尽力の及ぶべからざる経世なり」（『後楽園紀事』）とあるように、立体的な変化のある地形を活かし、生い茂る松などの巨木の自然を取り込んでいる。現在の東京からは想像できないが、家康入府後の数十年間はまだまだ江戸の街は喬木の生い茂る未開の自然地に覆われた街だった。大名たちは与えられた敷地の中で、その土地の持つ特徴を取り入れながら庭を造っていったのである。

二つ目は、二代将軍秀忠のころから始まった将軍の御成りに際して、おもてなし、饗宴の場として多くの人を招き入れることのできる庭園が必要不可欠であったからである。二代将軍秀忠、三代将軍家光は庭好きの将軍として知られている。大名屋敷への将軍の御成りは名誉なこ

第Ⅲ章

浜離宮恩賜庭園における修復・復元

一節 「中島の御茶屋」の復元から考える

1 「中島の御茶屋」の復元

憩いの空間を
文化財として見直す

江戸の大名庭園は、先に記したように明治維新に始まり、急速な都市化、関東大震災、戦火等の打撃を受け、消滅あるいは崩壊を余儀なくされた。

傷つき形を変えてしまった大名庭園を蘇らせていくためにどのような取り組みが行なわれてきたのか、具体的にどのような修復・復元工事が実施されてきたのだろうか。

江戸の四つの大名庭園（浜離宮恩賜庭園、小石川後楽園、旧芝離宮恩賜庭園、六義園）は、時代の変遷のなかで、戦後は長らく都民のほとりの憩いの空間としての役割を求められていた。それが、昭和五〇（一九七五）年代以降、いわゆる日本における高度経済成長の後、社会が身近な環境に目を向け始めたころ、江戸の大名庭園も文化財としての価値が見出されていったのだった。

そのような状況のなかで、浜離宮恩賜庭園では、焼失した御茶屋の復元が実施されたのである。それは苦勞の連続ではあったが、その後の東京都における文化財庭園の復元計画を作成し

ていくうえで、大きな役割を果たすとともに、復元事業推進の意味からも重要な事業となった。そして、東京都の正式な計画である「東京都における文化財庭園の保存管理計画」に基づく事業についても浜離宮恩賜庭園が先行して実施されることになるのである。

そこで、浜離宮恩賜庭園を事例として、当時の記録を参考にしながら復元工事の実際を記そう。

なお、現在の正式名称は都立浜離宮恩賜庭園であり、文化財としての名称は旧浜離宮庭園となっているが、江戸時代には「浜の御殿」、「浜苑」、「浜の邸」などさまざまな呼び方があった。ここでは、江戸時代については浜御殿と呼ぶことにし、明治時代以降の呼び方を浜離宮として呼ぶことにする。庭園については敢えて浜離宮庭園と呼んでいる箇所もある。

基礎を残してなくなった 承応三（一六五四）年、將軍家の鷹狩場で一面の海辺の蘆原であった中島の御茶屋 地を、徳川四代將軍家綱より拝領した弟の甲府宰相松平綱重は、海

を埋め立てて甲府浜屋敷と呼ばれる別邸を整備した。それが浜離宮恩賜庭園の始まりである。

その後、綱重の子の綱豊（家宣）が六代將軍になったのを契機に、この屋敷は將軍家の別邸となり、名称も「浜御殿」と改められた。家宣は園地の遊覧を好み、宝永四（一七〇七）年に大改造を行ない、中島の御茶屋、汐見の御茶屋（海手茶屋）、大手門、大泉水と横堀（潮入の池）などの施設を整備し庭園としての骨格を形成した。

浜御殿は大泉水を中心として景観が構成されており、将軍や賓客の饗宴の場として利用していた「中島の御茶屋」から眺める景色、大泉水に浮かぶ中島の御茶屋の優雅な景色が特徴でもあった。

しかし、明治維新の大変革の時期を乗り越え、関東大震災による被害も受けずに江戸時代の面影を残していたその御茶屋が、第二次世界大戦時の空襲によって焼失してしまい、基礎部分だけを残した無残な姿となってしまっていた(図1)。

昭和三三(一九五八)年、国や都の経済の立ち直りにより、東京都の公園緑地等の予算は大幅に増額された。その勢いのなかで中島の御茶屋復元に向けた予算確保の取り組みが始まったのである。

設計にあたっては、慶長年間から続く宮大工の名家を継ぐ建築家の伊藤平左エ門氏に昭和三四(一九五九)年基本設計を、翌年に実施設計を依頼した。しかし、建物がすべて失われて基礎しか残っていないなかで、姿を見たこともない御茶屋を復元する作業はなかなか大変だったと伊藤平左エ門氏は後に語っている。

実際、中島の御茶屋の復元は、そう簡単には進まなかった。東京都の公園行政は、昭和三九(一九六四)年開催の東京オリンピックに向けて公園整備の促進、その後、昭和四〇年代の高度経済成長に伴う光化学スモッグなどの大気汚染・公害対策としての都市緑化推進・公園面積の拡大といった政策に追われた。文化財庭園の復元工事への予算化は時代の主要課題に先を越



図1 基礎だけが残った「中島の御茶屋」

撮影は昭和29(1954)年。中島の御茶屋からの景色は園にとって重要な視点場の1つであった。それゆえその復元は待たれていた。下の図は当時の地割〔公益財団法人東京都公園協会提供〕



され、設計のみで工事は先送りされてしまったのである。

二三年経って工事着手、そして、やっと文化財庭園に対する見方が変わってきたのが、前述の焼失して三七年で蘇る 昭和五三（一九七八）年の「文化財庭園の管理のあり方」（63頁参照）

の答申からであり、中島の御茶屋の復元工事が始まったのは、基本設計から二三年も経過した昭和五七（一九八二）年であった。しかもその事業費は、一般社団法人日本宝くじ協会からの寄贈という形で進められたのである。当初設計に携わった伊藤平左エ門氏も、設計のことはすでに忘れてしまったころの事業着手となった。

復元設計は伊藤平左エ門氏の当初設計を基本とし、復元後の御茶屋の利用形態（御茶室として一般利用）も考えたうえで再設計することとなった。しかし、設計にあたっては参考とすべき資料が少なく、参考にしたのは明治二（一八六九）年及び大正九（一九二〇）年の平面図、明治一八年及び明治三五年の増築図と内訳書、昭和三（一九二八）年の改修図と内訳書、数枚の写真と一冊の造園研究誌、それと明治天皇とグラント將軍の会見の絵（図2）のみであった。長い年月の間に何回も増築改修を重ねた建物を復元する作業は、焼け跡に残った礎石の実測から始め、宮内庁に残された昔の図面、文献、写真をもとに考察し、竣工後の建物利用や管理上の問題を考慮に入れながら設計を進めた。中島の御茶屋は明治から昭和初期までの間に、部屋の配置や規模、意匠も刻々と変化してきており、特に室内意匠等は文明開化、欧米崇拜の波



図2 明治天皇とグラント将軍の会見の絵
明治維新後、浜離宮は外国からの賓客の接待所として利用されるようになった。明治12（1879）年8月、日本を訪れた米国前大統領のグラント将軍は園内の延遠館に滞在し、中島の御茶屋で明治天皇との会談に臨んだ〔大久保作次郎画『グラント将軍と御対話』、聖徳記念絵画館所蔵〕

のなかで特に変化が激しかった。

調査の結果、復元の資料としてはより原形に近いものとして明治二年の平面図を底本とした。しかし、畳の記載以外、図は簡単粗雑で細部については明らかにでないため、御座所の床の間付近の様子や、壁、天井、杉戸については焼失時まで変わっていないであろうと考え、その他の資料で補足し設計を行なったとのことであった。

また、明治一二（一八七九）年に明治天皇が米国前大統領グラント将軍と会見した際の絵は、歴史的事実としての貴重な資料であるとともに、中島の御茶屋の内部を今に残す貴重な絵ともなった。

その結果、平面形式は明治二年の平面図「浜殿園池全図」をもとに設計し、外観は幕末から明治初期の写真に基づいて設計を行なったのである（図3）。

浜離宮恩賜庭園は特別名勝とともに特別史跡であるため、復元工事は昭和五七（一九八二）年六月、文化財保護審議会、専



図3 「中島の御茶屋」の復元計画平面図

復元計画は、単に焼失前の姿に戻すのではなく、御茶室としての一般利用などを考えたものともなった〔「都市公園85号」昭和59（1984）年、公益財団法人東京都公園協会提供〕

門部会の議論を経て、同年一〇月、文化財保護法第八〇条の規定に基づく現状変更の申請を行ない、一月に許可を受けて工事着手となった。

中島の御茶屋の復元工事は東京都にとって初めての文化財庭園の復元であり、復元根拠となる史資料の収集、文化庁との調整、当時使用したであろう材料の検討と手配、建築に関する伝統技術を持った技能者の確保など、今までの庭園整備にない経験であった。

「なぜそのような平面図になったのか、根拠はどの資料に基づくのか、その根拠資料の信頼度はどの程度か」、「どのような材料を使用するのか、その材料としたのはどうしてなのか」、「建築工法はどの時代の工法を採用するのか」などなど、微に入り細に入り設計から、施工、材料に至るすべてに關して細心の注意と確認が必要であった。

なお、中島の御茶屋は江戸時代の御茶屋の復元であるため、使用した木材は外国産や張り物（集成材）は使用せず、檜、杉、松、ヒバなどすべて無垢の国産木材を使用した。そして、建

第三章 浜離宮恩賜庭園における修復・復元



図4 復元された「中島の御茶屋」
優美な意匠を有する中島の御茶屋が大泉水の中心に建てられたことによって、将軍家唯一の庭園としての風格を取り戻す契機となった〔公益財団法人東京都公園協会提供〕

物の基準尺である柱割は焼失前と同様、柱の芯々の間隔を六尺三寸（一・九〇九m）とした。これはいわゆる京間（六尺五寸）ではなく、江戸時代の田舎間の基準六尺三寸で、これが明治以降六尺となった。

そして、昭和五八（一九八三）年、中島の御茶屋の復元工事は完成した（図4）。昭和一九（一九四四）年の空襲によって焼失してから三九年ぶりに浜離宮の大泉水に中島の御茶屋が復元され、その優雅な姿を目にすることができたのである。このとき、長かった浜離宮の戦後の一つが終わったといえるのかもしれない。

2 復元工事にあたって何をどう考えるか

庭園の本質的価値を知る

中島の御茶屋の復元工事は、東京都における文化財庭園の復元計画がまだ作成されていないなかでの復元工事であり、復元に関する考え方の取りまとめや復元スケジュール等が何も決まっていない段階であった。そのため、提出資料の作成など今までにない経験のなかでの作業であり、苦勞の連続であったと聞かされている。しかし、この苦勞の経験が、文化財庭園を復元していくための計画づくりの必要性を強く実感させる結果となった。

それ以上に大きかったことは、徳川將軍家が楽しんだであろう優美な御茶屋の姿を、目の当たりにすることができるようになったことだ。大泉水の中心に中島の御茶屋が復元されたこと

により、当時の人々が感じた庭園の美しさを現代の私たちも体験できるようになった。

庭園の復元にあたったの基本的考え方の一つは、「その庭園の本質的価値を知る」ということである。浜離宮庭園の特徴でもある大泉水の景色は、「中島の御茶屋が復元されたことにより、大泉水の中心に浮かぶ御茶屋の優雅さ、その御茶屋から眺める水面の輝き、岸辺のみどりの木々の美しさとして価値を知ることができるようになったのである。

この後、浜離宮における復元工事は、先駆けとなった「中島の御茶屋復元工事」に引き続き順次工事が進められていくのであるが、まず取り掛からなければならなかったのが施設の老朽化に伴う修復工事であり、第二段階として焼失した施設の復元に取り掛かることとなった。

現在、中島の御茶屋は抹茶を飲みながら休憩できる飲食所として、多くの来園者に利用されている。浜離宮を訪れる外国人来園者の多くは、畳に座って大泉水の景色を眺めながら、この建物で抹茶と和菓子を食べる日本文化の体験を楽しんでいる。

どの時代に復元するか

東京都は昭和六二（一九八七）年、六三年と二年をかけて文化財庭園の保存・復元・管理等に関する調査を行ない、平成元（一九八九）年一二月には「文化財庭園の保存・復元・管理等に関する検討委員会」を設置、平成二年には計画が決定されるとともに、東京都の長期計画に「名園の復活計画」として事業が位置づけられた。そして、同年度には「浜離宮恩賜庭園修復復元のための調査」が開始されるのであるが、

復元事業を実施していくうえで、考古学的調査や根拠資料を正確に調べるだけではなく、それ以上に重要なのは、どの時代の姿に復元するかということなのである。

個々の施設の復元に取り掛かる前提として、どの時代の庭園の姿に復元しようと考えたのか、浜離宮庭園を例にその経緯も含めて記そう。

歴史ある庭園は所有者によって、その姿を大きく変えていく。浜離宮の場合、最初に將軍家の庭として大々的に整備したのは六代將軍家宣で、その後將軍が変わるたびに地割や施設が変えられてきた。

大名庭園においても、藩主が変わることによってその利用形態も変わり、大きく改変されることがたびたびあったため、庭園の復元時期をいつの時代に合わせるかは、残された資料や庭園の性格・特徴、そして現状を鑑みて決めていかなければならない。

現在の人々が庭園を訪れると、今見ている景色そのものが江戸時代に造られた庭園の姿であり、その姿であるからこそ特別名勝・特別史跡に指定されているのだろうと思ってしまうかもしれないが、決してそうではない。

浜離宮庭園を残された絵図で見えていくと、宝永四（一七〇七）年の『濱御殿地絵圖』（図5・90頁参照）以降、浜御殿が焼失した享保九（一七二四）年までの間、大泉水、中島と中島の御茶屋、それと水路のような横堀があり、庭の中心には大きな御殿があったと思われる。

享保九年、八代將軍吉宗の治世に、火災により御殿をはじめ中の御門等多くの建物が焼け、

その後、享保一七（一七三二）年に綱吉の側室と家宣の二人の側室のための建物である「三尼^{さんに}の館」が建てられた。『浜御殿惣絵図』（享保一七年前）（図6…91頁参照）を見ると「三尼の館」の北東側の樹林地には田や畑、水路等が造られていたことがわかる。なお吉宗の時代には、薬草園、製糖所、鍛冶小屋等殖産興業に関する施設が庭園内に多数建てられていた。

その後、享保一七年から宝暦六（一七五六）年の間の『濱之御庭（浜御殿関係図）』（図7…92頁参照）には、池周辺に回遊園路が描かれていることから、回遊式庭園として成り立っていたことがわかる。

一代将軍家斉の時代になると、家宣と同じく苑池での遊覧を好んだ家斉により、観賞性と回遊性が強化された。潮入の池周辺には、「燕の御茶屋」、「松の御茶屋」、「藁葺^{わらぶき}の茶屋（鷹の御茶屋）」、「お伝い橋」、「御亭^{おちんやま}山の腰掛」、「松原の腰掛」、「塩浜薬屋」、「新銭座東屋」、「樋之口東方の御山」、「藤棚」等が設けられた。

また、「御浜御殿ノ絵図」（寛政年間一七八九～一八〇一年ころ）（図8…93頁参照）では「三尼の館」や田や畑があった場所に「庚申堂鴨場^{こうしんとう}」が造られ、「横堀」から分岐した鳥溜めを観ることもできる。役人の管理地であった場所には「新銭座鴨場」が造られている。このように、従来の庭園空間に新たな意匠が加えられ、家斉の時代に本園の歴史上最も充実した時代を迎えた。

時代はずっと下りその約百年後、参謀本部陸軍部測量局が作成したのが「五千分一東京図測

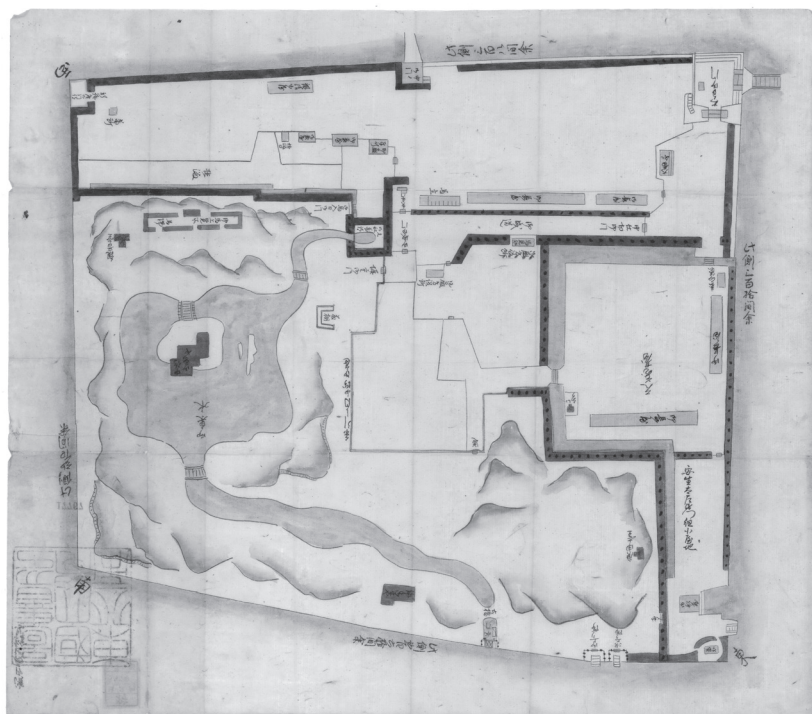


図5 6代将軍家宣のころの浜御殿

敷地のほぼ中央に御殿があり、周りには大泉水や横堀、中島の御茶屋、海手茶屋（汐見の御茶屋）、観音堂、庚申堂、稲生神社、馬場などが確認できる。このころに庭園としての骨格が整えられたことがわかる（『濱御殿地繪圖』、東北大学附属図書館所蔵）

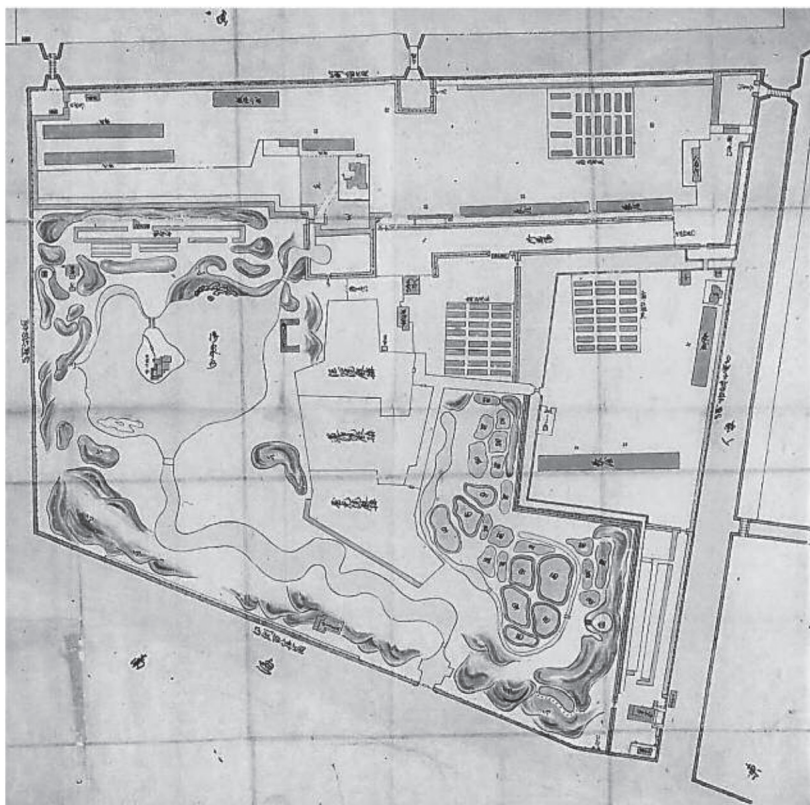


図6 8代将軍吉宗のころの浜御殿

吉宗にとって浜御殿は単なる鑑賞の場ではなく、さまざまな研究を行なう試験場でもあった。薩摩から種子を取り寄せた甘藷（かんしょ）で黒砂糖を生産し、400 種もの薬草を栽培した。変わったところでは「象部屋」があり、ベトナムから献上された象を飼った【『浜御殿惣絵図』、江戸東京博物館所蔵】

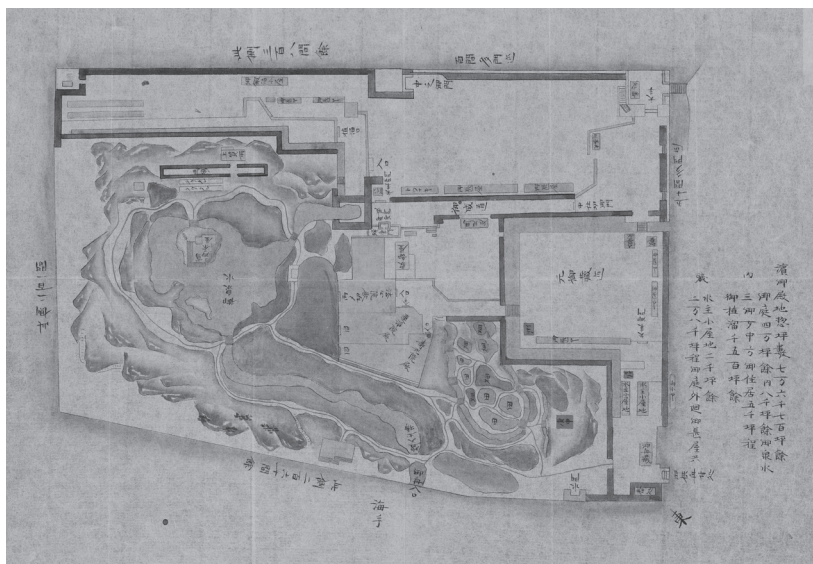


図7 9代將軍家重から十代將軍家治のころの浜御殿

大泉水や横堀の池の周りに園路が描かれ、このころから本格的な池泉回遊式の庭園になっていったと思われる〔『濱之御庭』、中央区立郷土天文館所蔵〕



図8 11代将軍家斉のころの浜御殿

大泉水周辺に3軒の御茶屋ができ、鴨場も2か所造られた。鴨場は江戸時代の大名庭園の特徴の1つとされる。家斉は鴨場で度々鷹狩を行なった〔『御浜御殿ノ絵図』、公益財団法人徳川黎明会徳川林政史研究所所蔵〕

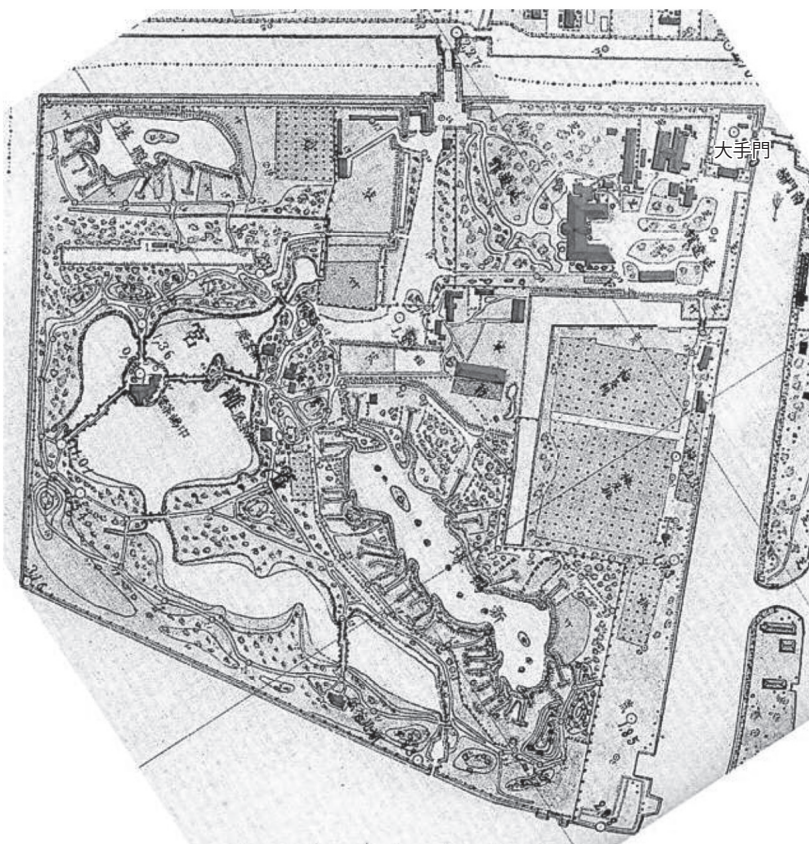


図9 浜御殿から浜離宮となつたころ

浜離宮という名称は、庭園の所有者が宮内省となった明治3（1870）年からであった。この前年近代日本最初の迎賓館である延遼館が庭園の一角（図の右上、大手門を入った辺り）に完成する。延遼館は明治23（1890）年に取り壊されることになるが、大泉水や横堀、鴨場の地割に大きな変更はなく江戸の頃の状態を以後も保った〔参謀本部陸軍部測量局『五千分一東京図測量原図』、（財）日本地図センター提供〕



- | | | |
|---------|-------------------|-----------|
| ① 松の御茶屋 | ⑧ 馬場跡 | ⑮ 将軍お上がり場 |
| ② 燕の御茶屋 | ⑨ 御亭山 (おちんやま) | ⑯ 大手門口 |
| ③ 鷹の御茶屋 | ⑩ 中の橋 | ⑰ 中の御門口 |
| ④ お伝い橋 | ⑪ 海手お伝い橋 | ⑱ 延遼館跡 |
| ⑤ 八景山 | ⑫ 汐見の御茶屋 (海手茶屋) 跡 | ⑲ 旧稻生神社 |
| ⑥ 藤棚 | ⑬ 樋の口山 | ⑳ 粃倉跡 |
| ⑦ 中島橋 | ⑭ 横堀水門 | |

図10 現在の浜離宮恩賜庭園

昭和20(1945)年に庭園は宮内省から東京都へ下賜され、名称を現在の「浜離宮恩賜庭園」と改めた。震災や戦災を経験し多くの建造物や構造物、庭木を失いながら、昭和23(1948)年には名勝及び史跡に指定され、その後特別名勝及び特別史跡となり現在に至る〔東京都建設局公園緑地「東京都における文化財庭園の保存活用計画(旧浜離宮庭園)」(平成29年3月)の「Ⅱ本園の変遷と本質的価値／3.本園の現況」を基に作成〕

量原図」(明治一七(一八八四)年)図9(94頁参照)である。地割はほぼ現在の浜離宮庭園と同じであるが、延遼^{えんりょうかん}館と付属する建物が建てられている。

現在の浜離宮恩賜庭園を図10(95頁参照)に示す。

復元は一番利用された 平成三(一九九二)年一二月、江戸大名庭園を含む都立文化財庭園について、学識経験者からなる専門委員会で、復元すべき時代や姿、復元方法、復元材料など検討することになった。

専門委員は、東京大学名誉教授井出久登氏を委員長とし、東京農業大学学長(当時)進士五十八氏、(社)日本庭園協会会長(当時)龍居竹之介氏、文化財指定庭園保護協議会会長(当時)樋渡達也氏、神奈川大学教授(当時)西和夫氏、千葉工業大学講師(当時)河東義之氏、東京農工大学教授(当時)亀山章氏を委員とし、その他文化庁や東京都教育庁、区の教育委員会職員を助言指導者等として構成されていた。

委員は庭園、建築、考古学、植生学等の専門家であり、必要に応じて石垣等の専門家を加えたワーキング組織を構成し、浜離宮をはじめとする、小石川後楽園、六義園、旧芝離宮恩賜庭園のどこをどのように復元していくかの具体的計画作成を行なっていったのである。

浜離宮庭園をどの時代の姿に復元すべきかについても、専門委員会での議論の末に決められていった。

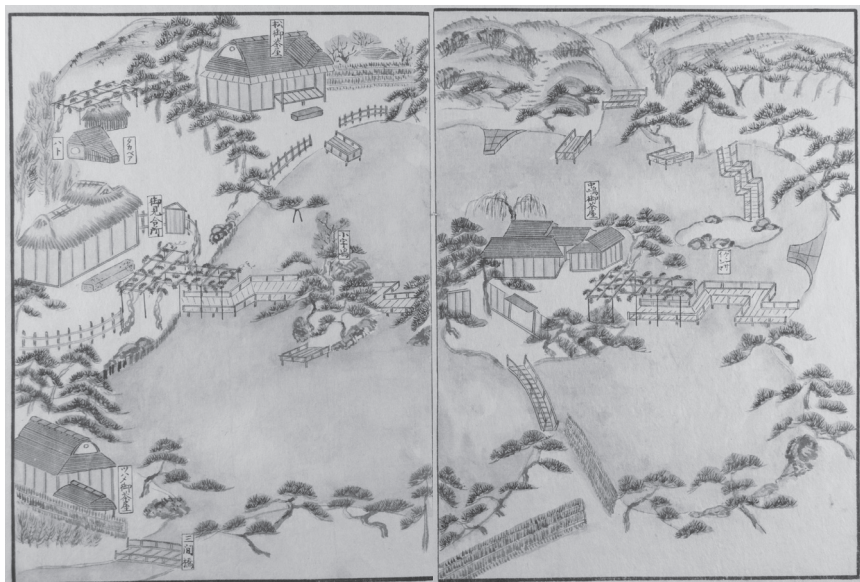


図11 第11代将軍家斉のころの浜御殿（大泉水と御茶屋）の絵
大泉水の周囲には松が多く植えられていた。また、お伝い橋の藤棚は橋全体を覆い、遠くからは回廊のように見えたとの記録もある（『浜の御苑之記』（天保5〈1834〉年）、国立国会図書館所蔵）

ある委員からは、「復元するならば、家宣が浜御殿として築庭した当時に戻すことが本来の姿である」といった意見が出された。また別の委員からは、「特別名勝・特別史跡に指定された時点の姿が文化財指定に値するのだから、昭和二七（一九五二）年指定当時の姿を保存していくべきで、時代の異なる施設を復元すべきではない」といった意見が出された。さらに、「庭園が最も盛んに利用された時期が庭園本来の役割や機能を果たした時期であると考えらるならば、その時期の姿に戻すべき」といった意見など、さまざまな意見が出され、その結果、「文化財庭園の保存・復元・管理等に関する計画」では復元に相当する時代の考え方を次のように規定することにした。

〈文化財保存の精神からは、創建時点の復元を原則とするがその後の改変の幅が大きい庭園の場合、それ以降のものの処理が難しい。また文化財保護法によれば、指定当時の状態を原状としている為、指定当時すでに衰亡してしまったものは法による原状に予定していない。しかし法の精神からは、この衰亡したものを原状に復することは、好ましいと考える。

今回の復元にあたっては原則として、時代を大きくとらえ、庭園の経年変化のなかで江戸の庭園様式を内包しつつ、その庭園の持ち味を最大に発揮した姿に復元する。したがって、時代による多少の不整合にはこだわらないこととし、明治以後の改変であっても、その取扱いが江戸の様式を継承しているのであれば、敢えて原状に復さないことにする〉

この考え方に基づき浜離宮庭園は以下のような復元を目指すことになった。

〈浜離宮恩賜庭園は二百十余年の徳川時代、その後七〇年の宮内省時代を経て多くの改変が加えられ、各時代の施設が混在した姿で現在に至っている。そこで、この庭園総体の修復目標は本庭園が一番利用された華やかな時期であり、大泉水周辺の茶屋群など江戸時代末期まで存在し資料も充実している「第一一代將軍家斉時代の姿」におく〉

「江戸時代後期において大改修を加えた家斉時代の姿に近くすることが妥当」、「全体の基調となる雰囲気は家斉時代を設定」が基本的なスタンスである。ただし、「庭園の構成施設については、良い状態で使用され、史資料の残っているものは、その時代を設定する」ともしている。つまり、浜離宮の各施設の修復・復元においては、「家斉時代の姿」を基本に、各施設の

置かれている状況に応じて時代設定を判断していくことにしたのである。

二節 復元工事は鴨場の修復から始まった

1 鴨場が選ばれた理由

平成四（一九九二）年度には「浜離宮恩賜庭園の修復調査」を、さらにソフト面の調査として「浜離宮恩賜庭園の保護と利用に関する調査」を実施した。こうした基礎的調査を終え、平成五年度から具体的な施設の修復整備にかかることとなり、同年度に「浜離宮庭園庚申堂鴨場修復設計調査」を実施し、計画を策定。同年度内に第一期の修復工事が開始されることになった。

なぜ、「庚申堂鴨場」が復元事業の先行事例となったのであろうか。老朽化が最も進んでいたことも確かである。しかし、それ以上に深刻な問題が起こっていたのである。文化財の重要性とは関係のない、それはカワウの糞害であった。



図 12 現在の新銭座鴨場Aと庚申堂鴨場Bの位置

鴨場の池の周りは樹木が鬱蒼と茂るなど水鳥の飛来する環境が元来整っていた。さらには長らく猫が行われていなかったこともカワウの繁殖を許した

將軍の御成りは 鴨場とは、溜池
鴨場あればこそ を中心に岸辺に

何か所もの引堀と呼ばれる細い水路をつくり、鴨をおびき寄せる施設である。鷹を放鳥して鴨を捕獲させる狩を行なうのが主流で、平和な江戸時代における武士の軍事的訓練であり、娯楽でもあった。幕末から明治になると、又手網を使^さって捕獲する鴨猟となったという。

鴨場は江戸時代の大名庭園の特徴の一つでもあり、大名屋敷の崩壊とともに破壊されてしまった。今日実際に鴨猟が行なわれているのは、宮内庁所管の越谷市の「埼玉鴨場」及び千葉県市川市の「新浜鴨場」の二か所である。一方、伝統的構造を持

つ施設は、浜離宮の「庚申堂鴨場」と「新錢座鴨場」（図12）だけである。なお、東京農業大学の服部勉らによる調査によると、鴨場と考えられる施設は江戸期の大名庭園では一六か所確認されている。

鴨場についての明確な文献は確認できていないが、一一代将軍家斉の治世、寛政三（一七九一）年の『浜御殿日記』に「御庭鴨場鴨堀新規出来」とあり、現在の庚申堂鴨場の成立と考えられている。将軍家斉は無類の庭好きといわれており、将軍が浜御殿に御成りになるのは歴代の将軍の中では家斉が最も多く二四八回の御成りがあった。将軍在職年数が五〇年と非常に長いこともあるが、庭を愛でるとともに、鴨場での鷹狩のために何回も浜御殿に御成りになったとの記録もあるほど鷹狩が好きであったようである。

不忍池から来た
カワウが住みだす

カワウとは全身はほぼ黒色で、カラスよりも大きくガチョウほどの大きさで体長約八〇センチメートルの鳥である。首や胸がほっそりと長めで水中を泳ぎ回って魚などを捕獲し餌としており、海の魚を餌とするウミウと、川や湖沼で生活するカワウとがいる。「鵜呑み」といわれるように魚を一気に飲み込んで捕獲するのである。ちなみに鵜飼の鵜は、体が少し大きいウミウが使われている。

カワウは全国的に生息していたが、無秩序な狩猟や川や湖沼の魚を食べるため駆除されたことによって数が減少してしまい、昭和四五（一九七〇）年当時全国で総数三〇〇〇羽以下まで

になった。一方、上野動物園では昭和四一年からカワウの飼育を放し飼いで始めたが、恩賜上野公園の不忍池しのばすのいけには新しいコロニーができればじめ、昭和四五年には一五〇〜一八〇羽のカワウが確認されていた。

福田道雄らによる「日本におけるカワウの生息状況の変遷」によると、一九七〇年代後半からは各地でカワウの数が増加に転じ、昭和六一（一九八六）年ころになると不忍池のコロニーから分派したカワウが浜離宮に住みだし、一九八〇年代後半には約二〇〇〇羽の群れになっていった。狩猟等や戦後の環境悪化により希少な種となるまで減少したカワウであったが、水質の改善や保護によってふたたび数を増加させ生息地を広げ、現在では有害鳥獣駆除の対象となるまでの個体数となったのである。

浜離宮では大正一三（一九二四）年ころからカワウ繁殖の記録があったが、昭和二五（一九五〇）年以降全国的な傾向としてカワウの生息数が少なくなっていた。ところが、昭和五五年以降、数百羽が飛来してくるようになり、平成二（一九九〇）年以降サギとともにカワウがコロニーを形成しはじめ、年々拡大していった。そのため、鴨場周辺は悪臭がするようになり、園路への糞の落下のため、来園者からの苦情が出るようになってきていた。また、糞や根の踏みつけによって樹齢三〇〇年のタブノキなどが枯れ始め、鴨場の景観も損なわれるようになっていった。